

平成二十七年度入学者選抜試験
個別学力試験問題(前期日程)

国

語

注 意

- 一、問題紙は指示があるまで開いてはいけません。
- 二、問題紙は十一ページ、解答用紙は一枚です。指示があつてから確認し、解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください。
- 三、答えはすべて解答用紙の所定のところに記入してください。
- 四、解答用紙は持ち帰つてはいけません。
- 五、試験終了後、問題紙は持ち帰つてください。

問 題 訂 正

国 語

6ページ

二 問題文 五行目

(誤) だから、われわれはまことによりも自然を見る眼め
を養わなければならぬ。

(正) だから、われわれはまことによりも自然を見る眼め
を養わなければならぬ。

一

次の文章を読んで、問い合わせに答えよ。

(この部分につきましては、著作権の関係により、公開しません。)

(この部分につきましては、著作権の関係により、公開しません。)

(この部分につきましては、著作権の関係により、公開しません。)

(この部分につきましては、著作権の関係により、公開しません。)

(濱澤龍彦「玩具のための『玩具』による。)

(注) ボーデレール——フランスの詩人(一八二一—一八六七)。『玩具のモラル』は、彼の散文詩。

メタモルフォーズ——変身。変形。

カイヨワ——フランスの社会学者(一九一三—一九七八)。

谷崎潤一郎——小説家(一八八六—一九六五)。

花田清輝——文芸評論家(一九〇九—一九七四)。

パースペクティヴ——見方、見地。

ぶりぶり——江戸時代に盛んに作られた玩具、飾り物。木製で、八角形の柵^{つち}に似た形。その由来や遊び方は不明な点が多い。

問一 傍線部1～5を漢字に書き改めよ。

問二 傍線部A「何と簡単な演出だつうー」について、「簡単な演出」となどのような演出であるか、述べよ。

問三 傍線部B「危険な玩具」について、筆者はなぜ仮面が危険な玩具だと考えるのか、説明せよ。

問四 傍線部C「阿諛追従」の意味を答えよ。

問五 空欄 ア に適当な二字の熟語を入れよ。

問六 積木の場合、シンボル価値はどうなると考えられるか。他の玩具と比較して述べよ。

次の文章を読んで、問い合わせよ。

(この部分につきましては、著作権の関係により、公開しません。)

(平野雅章編『魯山人味道』による。)

問 僕線部「われわれはまづなによりも自然を見る眼を養わなければならぬ」について、自然を見る眼をあなたはどのような方法で養えようと考へるか。具体例や根拠を示しながら述べよ。(解答は解答欄をほぼ満たす程度とすること。)

(下欄用)

--	--	--	--	--	--	--	--

次の文章を読んで、問いかねよ。

わらひしの里、をばすて山の用見たゞと、しきつたすすむる秋風の、心に吹きさはきて、ともに風雲の情をくふはすもの、またひとり、越人となる。木曾路は山深く道がしく、旅寝の力も心もとなしと、荷子が奴僕をしておへいす。おのの心ざし思へずといぐじむ、驛旅の事心得ぬわまじし、とゆどおほつかなく、ものいふの、じぶんたまひれあるむ、なかなかにをかしき事のみ多し。

何何といふ所にて、六十ばかりの道心の僧、おもしろげも、をかしげもあはず、ただ、むつむつとしたるが、腰たわむまで物おひ、息はせはしく、足はきせおやうだ、あゆみ来れるを、ともなひける人のあはれがりて、おのの肩にかけたるものども、かの僧のおひねものとひとつにからみて、馬に付けて、我をその上にのす。

高山奇峰、頭の上におぼひ重なりて、左は大河ながれ、岸下の千尋のおもひをなし、尺地も平らかなうされば、鞍のうへ静かならず。ただ、あやふき煩のみやむ時なし。

桟はし・寝覚など通れど、猿がばば・たち味などは四十八曲りとかや。九折重なりて、雲路にたどる心地せらる。歩行より行くものせく、眼くるめや、たましひじほみて、足さだまらざりけるに、かのつれたる奴僕、こともおそるるけしき見えず、馬のうへだひ、ただねぶりにねぶりて、落ちぬべき事あまたびなりけるを、あとより見あげて、あやふき事かぎりなし。仏の御心に衆生のうき世を見給ふも、かかる事にやと、無常迅速のうそがはなしも、我が身にかへり見られて、あはの鳴戸は波風もなかりけり。

夜は草の枕を求めて、昼のうちと思ひまついたるけしき、むすび捨てたる発句など、矢立取り出で、灯の下にめをとげ、頭たたきてうめき伏せば、かの道心の坊、旅懷の心うへて、物おもひするにやと推量し、我れをなぐさめんとす。わかき時をがみめぐりたる地、あみだのたるとき数をつくし、おのがあやしと思ひし事どもはなしりづくゆぞ、風情のきなりとなりて、何を語り出る事もせず。とてもまぎれたる月影の、かべの破れより木間がくれにさし入りて、引板の音、鹿おふ声、所々にかゝ

へける。まいりといふ、かなしき秋の心、トトロに思へせり。

(松尾芭蕉『更科紀行』による。)

(注) さらしなの里——長野県北部の地。

越人——越智十歳の俳号。北越(新潟県)の出身。

荷弓子——名古屋の医師、山本武右衛門の俳号。

おひねもの——背負つた荷物。

あはの鳴戸——淡路島と四国との間の鳴門海峡。うず潮で有名。伝吉田兼好の「世の中を渡りくらべて今ぞ知る阿波

の鳴戸は波風もなし」をふまえる。

矢立——旅行中に用いる筆記用具。

鹿おふ声——田畠から鹿を追い払うために竹で造つた道具。高い音を出す。

引板——鳥を追う鳴子。

問一 傍線部ア「ともなひける人」とは誰か。本文中の語句によつて一人挙げよ。

問二 傍線部イ「ひともおそるけしき見えず」を口語訳せよ。

問三 傍線部ウ「あとより見あげて、あやふき事かそりなし」を、主語を明らかにして口語訳せよ。

問四 傍線部エ「我れをなぐさめんとす」は、僧侶が芭蕉の様子を誤解したものである。誤解された芭蕉の様子と、僧侶がどん
よつたなぐせめたのかを、それぞれ具体的に説明せよ。

をばすて山——古くから「田毎の月」で知られる観月の名所。

木曾路——中山道の一部、馬籠峠から木曾谷を通る険しい道。

奴僕——旅の荷物を運ぶ下男のこと。

棧はし・寝覚・猿がばば・たち味——木曾路の途中にある難所。

次の文章を読んで、問い合わせに答えよ。（設問の都合で送り仮名・返り点を省いたところがある。）

史記云、「譽^{ムル}者或過^{イハギ}其^ノ實^ニ。毀^{ソシル}者或損^{イハナフト}其^ヲ真^ヲ」。愚謂^{ハラク}世人之毀譽^ヨ往往如是^A。凡^ソ毀譽^{スル}於人^ヲ者^ハ、當如以權衡計輕重^B。可^ク下以^テ公心^ヲ平直^ス之^ヲ、不可^レ下以^テ私意^ヲ輕重^ス之^ヲ。然則毀譽^{スル}於人^ヲ者^ハ、可^レ不^レ慎^マ乎。若抑揚之太^ダ過^{グレバ}則所毀譽^{スルヒテ}失^ニ其^ノ平實^ヲ而^ル不^レ謨^ラ者鮮矣^D。

(注)

愚——わたし。

權衡——重さをはかるばかり。

平直——公正で正しくする。

(眞原益軒『慎思錄』による。)

問一 傍線部A「是」について、その指示する内容を簡単に述べよ。

問二 傍線部Bは「当に」權衡を以て輕重を計るが如く「へ」と読む。これにしたがつて返り点を施せ。

問三 傍線部Cに「然則毀譽於人者、可不慎乎」とあるが、筆者などどのようなべきだと説うのか。説明せよ。

問四 傍線部D「鮮」はどのようだ読みべきだと考るか。文脈に即した読み方を送り仮名を含めてひらがなで書け。

問五 この文章に含まれる漢字二字でできた語句の中から、それぞれの語句が相互に反対の意味になつてゐるものと、二組抜き出せ。